

大屋書房 その1

明治15年(1882年)創業の大屋書房は、江戸時代に刊行されたあらゆるジャンルの出版物を扱う専門店だ。江戸文化の名残は明治中期の1900年頃まで及ぶため、同店の取り扱いも厳密にはその辺りまで。和本のほか、江戸時代の古地図、浮世絵、幕末・明治の古写真も扱う。本学所蔵の『鶏肉ケレー・ケレー酒効能書』は、明治10年に刊行されたケレーのレシピ本である。当時のケレーは現在のカレーとは異なり、鶏肉を煮込んでドロドロにしたスープのようなものだったそう。江戸や明治の風俗に関する資料の中でも、食べ物の資料は人気があるそう。豆腐料理を100種類紹介した豆腐百珍などが有名である。さらに西洋のテーブルマナーや蕎麦やカレーの説明本、レシピ本等は海外でも需要が多くあるそう。『鶏肉ケレー』も本学が購入後は、大屋書房でも取り扱いがなく、最近もアメリカの大学から問い合わせがあったそう。

大屋書房 その2

大屋書房では妖怪の資料を多く取り扱っている。これは4代目の瀬瀬くり氏が、若い人を神保町に呼ぶために何かできないかと考え、当時はまだ注目されていなかった妖怪の浮世絵などを扱い出したからだ。妖怪をきっかけに古書文化を知ってもらえるのではないかと思い、「妖怪カタログ」目録を2冊刊行し、好評を博した。現在、妖怪に関する資料は大変な人気が出ており、カタログ作成時よりも価格の高騰が激しく、価値は格段にアップしている。

4代目は妖怪で新しい道を切り開いたが、3代目も先代と違うことをやりたいと思い、古地図を集めたそう。元々ある文化を大切にしながら新しいスタイルを取り入れ、進化していくことが、長きに渡り「文化の橋渡し」として古書店を続けていくコツだという。

大屋書房 その3

大屋書房の創業から今日までには、世界大戦や、前後2回の神田の大火、関東大震災など、障害が多くあった。大屋書房の2代目は、火事で何もなくなってしまった時も、焼け跡にトタンで台をつくり、本を仕入れ、露店を開いたそうだ。どんな逆境にも負けずに、商いをし続けてくれたからこそ、私たちが神保町で何代も続く書店を訪問できるのだと感慨深い。

3代目に古書店の楽しみ方を聞いてみた。返ってきたのは、「古書店の魅力とは、博物館でガラスケースに飾られているような資料を、手に取って直に触れることができるところだ。普段古書店に入りづらいと思っている人も、ぜひ足を運んで、古書を手に取って、江戸時代の感覚を直に体験してほしい。」という言葉だった。現在、大屋書房の客層は7～8割が外国の方だということだが、古書店になじみのない、若い世代も、ぜひ江戸の空気を感じに行してほしい。

本の間に書名を書いた紙を挟むスタイルは、大屋書房さん独自のスタイルです。映画『姑獲鳥の夏』に出てくる京極堂という古書店は大屋書房がモデルになっており、このスタイルも参考にされています。



大屋書房

OHYA SHOBO LTD

江戸時代の古書・古地図と浮世絵版画の専門店 大屋書房 神田神保町1丁目1番地 ☎ 3291-3062



東陽堂書局

久慈堂

久慈堂

久慈堂

久慈堂

久慈堂

¥1,000

曲亭馬琴『南総里見八犬伝』
合本有104冊 全巻揃っています

